

スペシャルコラム

アイルランドからきた ピーターさん

Part. 3



8月27日に益田市制施行70周年記念事業の一つである「百人一首の魅力を知る 英訳を通じて感じた日本の美」と題する講演を行うため、再び益田を訪問する機会を得た。京都から新山口までは新幹線を利用したが、山口線の区間は普通列車に乗った。この選択は大正解だった。険しい山々と渓谷、のどかに広がる田畑など、車窓の絶景の変化に飽きることはなかった。清流高津川の川辺に羽を休める白鷺を見つけたときは息をのんだ。ひと駅ごとに、またトンネルを抜ける度に、大好きなまちに近づいているという実感が私の胸を高鳴らせた。

益田駅に着いたのは講演前日の金曜の夕方である。市役所の職員さんが手にアイルランド国旗を振って出迎えてくれたことは予想外だった。空を見上げると、スズメたちが家路を急ぐかのように朱色に染まった雲を横切った。

その晩は、山本市長ご一家に招かれ、

窓一面に海が見渡せるボンヌママンノブというフランス料理店で会食した。

太陽がゆっくりと沈み始めてから、漁火が明るく浮かぶまで、洗練された雰囲気と絶品の料理を味わいながら満ち足りたひとときを過ごすうち、学生時代に茶道をなさっていたという奥様の慎ましい所作に敬意を抱き、私が翻訳した『伊勢物語』を高校で学習中というご子息の聡明な眼差しに好感を持った。市長とは人間の生き方を巡る二つの考え方について考察した。理性を突き詰めていくことで正解に至るのか、理屈では割り切れないものの方を重視すべきなのか。市長は後者の立場であったが、実は私も同意見だった。このように深遠な議論ができることは十分に楽しいが、さらに見解まで一致するとなお愉快である。

翌朝、市役所の職員さんに佐毘売山神社を案内してもらった。由緒正しく霊験あらたかな土地の氏神様にお参り

できたことで益田市の人々と一体になれた気がした。できることなら、すべての益田市民に一生に一度は参拝していただきたいとさえ思う。次に、グラントワ、そして美しい飯田橋、安富橋にも連れて行ってもらった。「川とともに暮らす」と言った昔の人と心を通わせられた気がした。

次に訪問した後藤商店の自動販売機の出来立てうどんは思わぬ掘り出し物だった。ちょうど、国道に沿って「販売機巡り」をしていたバイクの一行に出会い、道中のよもやま話を聞くことができた。ふと私もそんな旅がしたくなり、市長も一緒に行ってくださいたらいいなと思いを巡らせた。午前最後の訪問地となった山陰のモンサンミッシェル、衣毘須神社も忘れがたい。

午後の講演には熱心な聴講者が多数詰めかけてくれ、充実した質疑応答もできた。終了後は、快活な河上副市長と意見交換をした。

次の朝、マスコスホテルを5時前にチェックアウトし、事故なく楽しい旅ができたお礼にもう一度佐毘売山神社に詣でてから、次の目的地である出雲に向かう汽車に乗った。私にとって二度目の益田の旅は、北は海、南は山に囲まれたこの地の、あちらこちらに散在する魅惑の数々との出会いであり、私を和ませてくれる優しい何かが、佐毘売山の境内に、海辺に打ち寄せる波に、川面を吹き渡る風に、そして何より、益田の人々のあたたかい心の中にあることを知る機会となった。

問 市観光交流課 ☎ 31-0331



翻訳家・版画家・詩人

ピーター・J・マクミラン

アイルランド生まれ。アイルランド国立大学ユニバーシティ・カレッジ・ダブリンを首席で卒業後、同大学院で哲学の修士号、米国で英文学の博士号を取得。プリンストン、コロンビア、オックスフォードの各大学で客員研究員を務める。渡日後は杏林大学教授、東京女子大学講師を歴任。現在は相模女子大学客員教授・東京大学非常勤講師を務める。2008年に英訳『百人一首』を出版し、日米で翻訳賞を受賞。2016年に英訳『伊勢物語』、2018年に『百人一首』の新訳を出版。また、アーティストとして『西斎』名義で版画制作活動を行っている。日本の著書に『日本の古典を英語で読む』『松尾芭蕉を旅する』など多数。朝日新聞で「星の林に」、京都新聞で「古典を楽しむ」を連載中。

益田市は、東京2020パラリンピックでのアイルランドサイクリングチームの事前キャンプ受入れを契機にアイルランドとの交流を進めています。スペシャルコラム『アイルランドからきたピーターさん』では、アイルランド出身で益田市ともご縁のあるピーター・J・マクミランさんのコラムを全4回にわたってお届けします。第3回のテーマは「益田訪問記」です。